第104回『わかるように伝えていますか』

香川大学　坂井　聡

保護者の協力

高等学校等での個別の配慮を考えるとき、保護者の協力は欠かすことができません。教員だけですべて実施するのは困難な場合も多いからです。Ｔさんの保護者には、教科書へのルビうちを適宜依頼するなどしているということでした。その際、Ｔさん専用のiPadを使ってもらっています。また、授業の予習はiPadでデジタル教科書を読み上げさせる方法でおこなっているということでした。

英語学習において

Ｔさんの学習上の困難が特に顕著に現れたのは英語の学習でした。アルファベットの認識が困難であるため、プリントを拡大する配慮では意味をなしませんでした。実際に週に３回実施している英単語の小テストでは、プリント拡大の配慮をしていたのですが、１０問中１問程度しか正解ができなかったのです。そこで、英単語の学習時にVOCA-PEN（ボカペン）というペン型のICT機器を使用することとしました。VOCA-PENはシールに録音ができ、そのシールをペンで読み取ることで、録音された音が再生されるというものです。コムフレンドという会社が取り扱っているものを用意しました。Ｔさんの使用している単語帳の単語一つ一つにシールを貼り、発音した音声を吹き込んだ。テストにもシールを貼り、音声を聞いて解答してもらうようにしたのです。VOCA-PENは、イヤホンでも音声再生がさせる機能があるため、通常の試験方法で他のクラスメイトと一緒にテストを受けることができました。

音声の吹込みには、ALTの協力もあり、ネイティブの発音を聞いて勉強できることになりました。その結果、合格する問題数は１０問中６から７問に増えたのです。加えて、単語帳を英語の裏に意味を書いたものと、英語の裏にVOCA-PENで聞いたままの発音を、ひらがなやカタカナで書いたものとの２種類作ることにしました。その結果、毎回ほぼ満点をとることができるようになったのです。

Ｔさんの感想は、「一度VOCA-PENで再生させて聞くので、時間はかかるけど、単語帳つくる時に集中して書くので、書いたら覚えますね。」と述べていました。これまで、見てもわからなかったために、書いて覚えるということをしてこなかったのですが、ICT機器を用いたことで、学習のハードルが下がり、書いて覚えるというアナログな学習方法にも効果があったということだと考えられます。本人に合った学習方法を提案することができれば、力をつけることができる生徒がいるということなのです。

本事例は、普段の学習や定期考査の出題が音声にできれば、本来持っている力が発揮できる生徒が存在することを示しています。しかし、現在の高校での英語学習は読みを前提としているものが多く、その力がないと評価の入り口にすら立てないのも事実です。今後の課題となるのではないかと思います。

クラスメイトの理解

クラスの生徒については、ほとんどの生徒が同じ中学校から進学しているという地理的なものもあり、彼に対する配慮について疑問の声が上がることはありませんでした。中学校での生徒理解の指導が行き届いていたからだと考えられます。中学校での学級づくりがとても重要だということです。

本人の希望で入学後すぐ、クラスに対して彼が漢字や英語が認識しにくいことと、そのためにプリントが違ったり授業中にICレコーダーを使ったりすることがあることを説明しました。その際、担任は誰にでも苦手なことはあるので、困ったことがあれば相談に来てほしいということ、苦手な部分を補い合えるようなクラスにしたいという想いを伝えたということでした。

～坂井聡先生の紹介～

（（プロフィール））

香川大学教育学部卒業　金沢大学大学院教育学研究科修了、香川大学教育学部附属養護学校など養護学校教諭を経て、現在香川大学教育学部障害児教育コース准教授。 1997年には自閉症のコミュニケーション指導で辻村奨励賞受賞。2013年より教授に就任。

（（著書））

暮らしの中のコミュニケーション（やまびこの里）、クラスルームコミュニケーション（こころリース出版社）、
自閉症や知的障害をもつ人とのコミュニケーションのための10のアイデア（エンパワメント研究所）など